

氏名(本籍)	とび 飛 田	みつる 満 (東京都)
学位の種類	博 士 (文 学)	
学位記番号	博 甲 第 1,050 号	
学位授与年月日	平成 5 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当	
審査研究科	哲学・思想研究科	
学位論文題目	精神現象学研究－ヘーゲルにおける「自己意識」の概念をめぐる－	
主 査	筑波大学教授	文学博士 工 藤 喜 作
副 査	筑波大学教授	文学博士 廣 川 洋 一
副 査	筑波大学教授	水 野 建 雄
副 査	筑波大学教授	増 成 隆 士
副 査	筑波大学助教授	文学博士 笹 澤 豊

## 論 文 の 要 旨

本論文は、ヘーゲルの名著『精神現象学』における「自己意識」を同書の理念との関わりの中で体系的に論じたものである。このため、同書の全体が「意識の歴史」として再構成されていく中で、彼の自己意識概念の独自性を明らかにする。かくて本論文は自己意識概念を導きの糸とした同書の一つの可能的解釈を呈示する。

本論文の構成は11章にわたる本論とそれを総括した「終章」、さらに一篇の「補論」から成る。

第1章「ドイツ観念論における自己意識理論」ではヘーゲルの先行哲学者、カント、フィヒテ、シェリングの自己意識論の端緒が解明され、三人の哲学者に共通なこととして、①いっさいの知の根底に存するア・プリオリな原理があること、②三者が自己意識を自我の純粋な自己関係として理解したこと、③特に後二者において自己意識の構造的な叙述が試みられたことを指摘する。

第2章「ヘーゲルにおける自己意識の問題」ではヘーゲルの自己意識を主題とした最近ドイツの研究者四人を取り上げ、これらの研究を詳細に研究することによって、ヘーゲルの自己意識が『精神現象学』全体に関わるものとして扱われねばならないことが主張される。

第3章「『精神現象学』の研究史」において『精神現象学』の研究史が概観され、その趨勢が論じられる。とりわけここで著者が問題としたことは、19世紀におけるヘーゲル学派と反ヘーゲル的後期観念論の解釈、今世紀前半の新ヘーゲル主義の解釈の検討である。続いてヘーゲル左派とマルクス主義の解釈、さらに、実存主義的解釈等の特徴点を指摘する。

第4章「現象知の叙述と学の実現」では、『精神現象学』の理念が主として方法論的な視点から探

求される。かくてこの著作においては「学の実現」のために「現象知の叙述」が企てられねばならないこと、またその際その叙述は自然的意識と「われわれ」哲学者という二つの立場から構成されること、しかもそこでは意識が自分の知を「吟味」するために「われわれ」にはただ純粋な「傍観」しか残されていないことなどが明確にされる。

第5章「意識の本性と自己意識の生成」では、「意識は一方で対象の意識であるとともに、他方で自分自身の意識である」というテーゼの意味が再考される。そしてこのことによって『精神現象学』の理念が「自己意識」の原理によって基礎づけられていること証示される。そして「感覚的確信」と「知覚」と「悟性」とから成る意識の三段階が分析されることによって、意識がいかなる意味において自己意識であるのかが明らかにされる。同時にここでは意識の本性としての自己関係性と対象意識からの自己意識の生成というヘーゲル特有の意識理論の核心が、デカルト以来の近代哲学との関連において論じられる。

第6章「意識の形態としての自己意識（I）」では、狭義の自己意識の本質が究明されるとともに、この意識形態の主要な展開としてのいわゆる「主人と奴隷」の弁証法の意義が問題とされる。とりわけここでは自己意識が「自我は自我である」という孤独な自我の単なる主観性ではなく、「われわれであるわれとわれであるわれわれ」という複数の自我の相互主観性でもあることが強調される。

第7章「意識の形態としての自己意識（II）」では狭義の自己意識の展開として主題化される「自己意識の自由」の意義が問題とされるとともに、この「自由」が、先行する「主人と奴隷」の弁証法において言及される「自己意識の二重化」の内面化されたものであることが指摘される。

第8章「意識と自己意識との統一としての理性」では『精神現象学』の「理性」の段階が、とりわけこの著作の構想の統一性についての問いとの関わりから考察され、それから導き出される極めて迂余曲折した「理性」の展開が、先行する「意識」と「自己意識」の展開の構造的な反復であることが証明される。

第9章「世界精神としての自己意識」では、『精神現象学』の「精神」の段階が考究され、その際世界史との対応にも注意が促されるなかで、その「精神」の概念が最終的に社会的・歴史的な諸関係のなかで形成される人間的存在の自己意識として規定されるとともに、そのような精神概念の体系性が問われる。

第10章「精神の自己意識としての宗教」では、『精神現象学』の宗教理論が検討される。ここで展開される宗教概念（「宗教とは精神の自己意識である」）の意味が、主として「精神の意識」と「精神の自己意識」との関係や後者における「意識」と「自己意識」との関係から詳らかにされる。

第11章「精神と宗教との統合としての絶対知」は、ヘーゲル哲学の鍵概念である「絶対知」の解明を試みる。この際特に絶対知の「成立」が主題的に取り上げられる。そしてこれによってこの知が「意識」と「自己意識」との統一であるとともに「精神」と「宗教」との統合でもあることが闡明にされる。

「終章」では、ヘーゲルにおける「自己意識」の概念をめぐる第1章から前章までの論議が総括され、8つのテーゼにまとめられる。①『精神現象学』は、自己意識の原理に基づく意識形成の歴

史であること、②ヘーゲルの「意識の形成の歴史」は、フィヒテの「人間精神の歴史」とシェリングの「自己意識の歴史」の思想の影響のもとで構想されているということ、③『精神現象学』の内的構造は、原則的に「意識」と「自己意識」の二契機から説明されるということ、④『精神現象学』においては、「原理」としての自己意識と「形態」(現象)としての自己意識が区別されるということ、⑤ヘーゲルにとって自己意識とは、対象意識から生成する弁証法的な自己意識であること、⑥またそれは内省的な自我の自己関係性であるとともに、協働的な精神の相互主観性であるということ、⑦ヘーゲルは『精神現象学』において「反省理論」から解放されず、厳密な意味における自己意識理論をもたらさなかったということ、そして⑧ヘーゲルの自己意識概念の独自性は、「自己意識はそれ自身からは理解されえない」というヘーゲル特有の自己意識理論の端緒から説明されるということが指摘されるとともに、またそれぞれのテーゼについて注解が加えられる。

最後の「補論」では、このようなヘーゲルにおける「自己意識」の概念をめぐる議論から離れて、現代ドイツにおける自己意識理論の一局面として、ディーター・ヘンリヒ、ウルリッヒ・ポタースト、エルンスト・トゥーゲントハットの理論が取り上げられ、その中心的な思想が論評されるとともに、主として反省理論のアポリアの解決という視点からドイツ古典哲学と言語分析哲学との接点が探求される。

## 審査の要旨

本論文は「自己意識」という観点のもとで『精神現象学』を統一的に解釈しなおしたものである。このため、先ず著者はなぜ自己意識の観点に立たねばならなかったかという点について、ヘーゲルの先行哲学者や現代ドイツの代表的ヘーゲル研究者の研究を批判的に手堅く論述している。とりわけ後者については立ち入った研究がなされ、現代ドイツのヘーゲル研究の動向を伝えている。そして著者が独自の方向性を打ち出そうと努力している点は評価できる。

しかし不備な点がないわけではない。一つの観点からテキスト全体をとらえなおす点には異論はないが、その「全体」をいかなるものとしてとらえるかが問題であろう。本論文ではこのことがテキストを逐次順を追って解釈するという方向でなされている。このため、読者に少なからず労苦を強いることになったのは否めないし、またこのようなやり方では著者自身の当初いただいた独自性が強く打ち出されなかったのではないかと思われる。今後公刊の際にはその独自性を打ち出すべき工夫が必要となろう。

以上、本論文には多少の不備が見られるが、全体として見れば、ヘーゲルの『精神現象学』の研究に特色ある一歩を印したのものとして、学界に貢献するところ少なくないものと認められる。

よって、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。